





古典詩集



佐藤一英著



538



50
11

MEMPHIS · AVE · PBR · CAMP · 1960

古典詩集

MCMXXVIII - AVRIL - PAR CAMÉLIAE



古典詩集



佐藤一英著





01652528 · AYRU · PAR · CAMÉ · IUAO



古典詩集



佐藤一英着

古典詩集



佐藤一英着

此の晴れた日に私は自らの微笑の
貧しさを恐れる
(三富朽葉)

装幀 龜山巖

目次

詩集『晴天』の序文として……………佐藤春夫

晴天

野の妻におくる歌……………九

老……………一〇

水上の満月……………三

酒……………四

故郷へ……………七

夜	六月の窓	四
冬	の雨	四
香	の爐	四
病	める蠶	五
一	日の終焉	五
雨	後	五
あ	る夕暮	五
親	鸞聖人御逮夜	六
冬	の午後	六
羅	漢堂冬夜	七

寂	しい墓	九
真	珠	三
冬		五
扉		二
亡	い母に	六
池	を去る前に	三
深	淵	四
T	に	六
秋		五
芬	陀利華	四

晴天拾遺

秋	日	三
イントキシケイション		六
氷	雨	六
無	題	八
平	安	八
静物に讚す		八
夜の街		七
夜の躑躅		八
夕	の歌	九

晴天以後

明	暗	五	
一日の微風		五	
落	葉	樹	三
夏	の	夕	四
空		居	七
思ひ出の小徑		一〇	
過		勞	二
夜の雨		四	
怠惰のとき		六	

古典詩集

夜の時	二八
梅雨期	三〇
春立つ前に	三三
最終の夢	三四
老いた空	三七
梅雨月光曲	三九
静御前	四三
羽衣	四四

詩集『晴天』を評す……………萩原朔太郎

目次終

詩集『晴天』の序文として

佐藤一英君。私は君の詩集に序を書くことを欣快とします。その理由を述べる必要から君が今夕私に與へた手紙の重なる部分を引用することを許して下さい。君の手紙は言ふ——『私はいま、貴方と最初で、また一度きりの貴方との會談の夜を思ひ出します。貴方は下戸塚の藤森のわび住ひの一室で、海底の魚が上層にたゞよふ光をしたひあふぐやうな眼差をもつて「僕は地上のことを考へるより天上のことを思ふことの方が愉快だ。そんな男にできてゐる」とお言ひだつた。それだけがはつきりと空間に浮んで見えます。私も「そ

んな男にできてゐる」のです。ただそれだけの理由で私に、私の近刊詩集「晴天」の序文を書いてくれませんか。下さるものと信じます。』

私は先づ君の卒直な言分をうれしく思ひます。且つ、或る瞬間に私の口から洩れた言葉が、君の心のなかにそれほど永く残されてゐたといふ事實を知ることがは更にうれしいことです。世にはこゝろを込めて誓つても消えて仕舞ふ言葉もあるのに、また同じ世に、ただ己れの感興のまにまに自分自身を述べたいといふ欲望から、別にそれほど相手にも留めずに言つた言葉が、消えずに君の心に残つてゐた。この事實をうれしいと言はずには、人の世で何をうれしいと呼ぶべきであらうか。尙もその上に君は「ただそれだけの理由で」

私に序を書けと言ふ。「ただそれだけ」——然もこれだけの理山さへあれば人にものを頼むには充分である。君が信じた通りに私が今、氣輕に欣然としてこれを書く所以である。

實際私は「地上のことを考へるより天上のことを思ふことの方が愉快だ、そんな男に出来てゐる。」しかし、それは私が、必ずしも強い意志を抱いて不斷に現實を粉碎しつゝ、高い理想に猛進するの人であるからではなくして、逆に、あまりに弱い意志によつて、身のまはりの地上に、いつも非運を呼び起す靈があるからである。

『私も「そんな男に出来てゐる」のです』といふ君は、果してどの意味で天上を夢みる人なのであらう。願はくば私自身の如くでは無くあれ。君自身が私に就いて言つたごとく『海底の魚が上層の水に

漂ふ光を慕ひ仰ぐ』やうであれ。私自身に就いて言へば、私はただ
浅い泥溝にゐる水蟲が喘ぎ喘ぎ水に浮んだ星影にしたひ寄るやうな
者にしか過ぎない。——詩人佐藤一英君。君は私が常に私自身をの
み語りすぎること許して、これを君の詩集の序としてくれること
を信ずる。

私は君の詩集「晴天」が世に出ることを楽しんで待つものです。

大正十年六月十一日夜

東京青山にて

佐藤春夫

晴天

野の妻におくる歌

陰の陰の海のやうに

老

僕のかゝる椅子はゆれる
梯子のやうに、船のやうに

僕の髭にかゝれる塵
白し、帆のやうに

僕は老ゆる

水上の満月

満月よ お前はひと夜

こつそりと

流れ静かな水の上に横はる

搖籃でゆられる

みどり兒のやうに

と忽ちお前の姿は消える

忽ちお前は何處どこからか

白い可憐な掌てのひらを出す

うら若い母の胸をかいなでる

みどり兒のやうに

掌はうごく白くちらちらと

そのてのひらは或ときは

大きな乳房にふれるけれど

無心に腋にすべり落ちる

ああ可憐なる水上の満月よ

酒

毒よりもなほ恐ろしく

血よりも陰氣な黄ろい酒よ

だが己みがたく杯を舉げる

地獄の底に、あらしを断えず聞きながら

僕をあはれめ、やさしい友よ

僕には語るな、雨に折れた薔薇の姿を

飛び散つた扉の行衛を
また病む、僕の父母を

濺げよ、妻よ、あつい涙と最後の酒を

冷たい床に僕は坐つて

纒かに白い冬の光と

「罪」とを共に飲まふ程に

ああ落ちよ、静かなる眠りの翼よ
わが唇が砂のやうに乾く前に

闇よ、とさせよ、墓の戸口を
僕と「記憶」を封ずるために

故郷へ

僕にはもはや慰めでない、酒も歌も夕暮れも
四月の空は暮れかかる、僕は書齋に歸つて行く
灯ひがついた、虚からの花瓶にすつかり塵がかかつてゐる
その青磁に映つてゐるのは「秋」と「冬」との光ばかり
だ

妹よ、僕はもう故郷へ歸つて行かうね！

あの大きな廢寺の壁には樂書がのこつてゐると

いつたね！

燕らの飛び交ふ簷の、その壁に、もたれかかつて

話さうね！

楽しかつた昔ばかりを！

寂しい墓

薄のなかに寂しい小さな墓場がある

たえまもない氷雨に、花はちぢ草は傾いてゐる

(その一隅に空虚しい墓穴があつたことを誰が知つてゐたらうか?)

其處の土はたと黄ろい入日にのみ温められ

數本の鳥の拔毛に飾られてゐた

薄暗い船室の死の床に、美しい一人のママが臥してゐた
その夜、窓硝子は曇り、ランプは物憂げに揺れてゐた

(この歸りの旅が、冷たい影に覆はれるのであつたこと
を誰が知つてゐたらうか?)

小さい娘はママの凍えた手を取り、眠り

次ぎの娘は色褪せた、ママの髪に顔を埋めて、眠つてゐ
た

故郷ふるさとの館やの屋根の上には、その明方に霜が置いてた
大きい娘は、海の虹を胸に描き、眼醒めてゐた

朝日はすでに風見にくだけ、鳥は歌をばはじめたときに
ほころびかけた唇の微笑みさへが凍つたことを

(彼女自身氣づかなんだに、誰が知つてゐたらうか?)

薄のなかに寂しい小さな墓場がある

たえまもない氷雨に、花は落ち莖は傾いてゐる

かつて空ひま虚むしかつた墓穴に、ママは靜かに眠つてゐるの
を

(誰がどうしえようか?)

入日は其處をやはらかに温め

數本の花が鳥の拔毛にかはつて飾られてゐる

眞 珠

私の腕に抱れてゐるとき、たまをよ、お前は海のやうだ
私は胸に静かな静かな波のうねりを感じよ
また心にきくよ、午睡の海のかすかな寢息を

そしてお前の明るい髪は、私の腕に碧空の
夢を巻いて流れるよ、白い渚をゆく藻のやうに

私はそれで酔つて了ふ、そしてうつらと凝視めてゐる
海の底の眞珠が光るを、貝のやうな臉の陰に！

冬

翼折られた鳩かとばかり枯れた梢の半月よ！
山裾に白き牙をむき笑ふ雪の一つらよ！

われは鳥、泣きさけぶ曠野の空をつき進む！

扉

僕の背には白い月、續く石階
前には扉、枯枝のみだれる影と僕の影

(ああ今宵僕は破れた垣の杵にも異らず……)

その折君は妹のためにジャケットを編んでゐたであらう
君は針持つ指のひまから幸福が消えて行くのを見なんだ

か

古びた額がから夕日の色が消え去るやう

僕はその夜、君に會はずに家に歸つた
歸り路に僕が投げた水仙は流れに冬を死んだであらう
僕が觸れた扉の把手に翌朝君は粗く觸れたことだらう！

亡い母に—

墓の底に黙せる母よ、冷たい母よ、

やさしい哀憐も塞して了ふ一月雲が空にあつても

朝日に輝やく花薔薇がお身の腫に今揺がぬとは思はれな
い

死する前の熱い涙は凍る間にも顫ひ咲く光の花であつた
のだから

散らぬ凋まぬ花だつたから

墓の底に黙せる母よ、冷たい母よ

力強い情熱の翼さへ折る、雲まじりの風が吹いても

可憐な蝶が、お身の口邊に今舞はぬとは思はれない

死する前の細い吐息は花より甘い蜜が混つてゐたのだから

消えぬ香りがあつたのだから

わが母上よ、蝶をおくれよ

その雙の翅の上に、夕日と燃える沈黙の言葉をのせて

(いま庭に、隅なく氷の影横はり

井戸に水はかれはてし、妹は嘆いてゐるのだから)

わが母上よ、薔薇をおくれよ

その葉の蔭に、瞳と耀く燭を添えて

(いま窓に、嵐は迫り

燭臺の倒れた傍、妹は祈つてゐるのだから)

わが母上よ、しのび來れよ

底知れぬ墓穴をいで

(いま窓の内、闇は下り、時計はとまる

ひとり空に月は刃のやうに輝く)

その冷たい光をともし

眠る妹の床のなかへ送り入れよ

夢は光の花を開かう、愛は氷の鐘を鳴らさう!

池を去る前に

陽は落ちた、妹よ、白菊の花を捨てよ

遠き丘に落葉せる並木路續く

車はみえず、車輪の音のみ、寄り添へよ、妹よ

微風がわたる、光の死んだ池水を撫で、破れた蓮の葉を

揺り

妹よ、われらこの池を去る前、森の奥なる墓場に行いて

落葉の下に冷たく古き香りある泉を汲まふ！

深淵

この深夜、地は深い淵のやうだ
その底を這ふ貝か、小魚か、私は
手燭を持つて闇の庭をさまよふ……

(沈黙を青い闇はかがやく)

忽ちに地はけがされた、一條の不浄の思慕に……

燭は消えた、おどろきて空を仰げば
深い空に銀河は動く……

(こは邪淫の蛇、白い腹をゆすりつゝ這ふ！)

ふるへつゝ南へ南へしたひ逃れば
ちらばる星は亡者らが黒い衣をかきつゝ
手に手にささげ、さ迷ふ數多の燭である

(あゝ今宵、空も地も深い深い淵と變つた！)

T
—
に

悲し、悲し、伊吹嵐はかの森陰の
池を氷に閉じただらう
君と寄りそひ、もたれた籬の
薔薇を無惨に散らしただらう

さて、どうなつたか、君が密房へやにて
見入つた君の黒い瞳は？

わが首にみだれた、君の豊かな髪は？
囁きは……？

ああ、いまのわれら二人は
離ればなれの落葉ぢやないか！
夕陽のなかにしばし舞はせよ
よしまた西と東に散るも！

秋

秋風が吹く、大空を、また暗い私の胸の奥を
とある林の枯枝に小鳥はしよんぼり歌もうたはず
そよぐ胸毛に「夏」と「秋」とをちらちらさせて
眞赤に、眞赤に陽が落ちる……

ひねもす私は雨のやうな落葉を身に浴び

(埋れた斧は堀らうともせず)

道もわからぬ崖に坐つて遠くへ思ひを飛ばせてゐる……

あゝ故郷の古びた大きい家の窓

わが妹の暗い顔——

おおその澄んでる瞳には冬の湖さへ映つてゐる
たまをよ、雨戸をすつかりしめて暖爐をあこせ
また休んでゐる時計にねぢせ！

さて夜だ、私は林に深く這らう

そして死んだ「昨日の花」と枯れた「秋」とを灰となし

芬
陀
利
華

— 40

焚火の影に池の水面みづうみに孤獨ひとりの影をうつしつゝ夜の明ける
まで眺めあかさう！

夜

部室の燈火ともしびかき消えぬ

(家は海の底に落ちたり)

吾れは悲しく頰杖つきて耳を傾く

長き廊下の入口に「暗黒」とまた「痴愚」との亂れたる

足音起る……

心はおびゆ、雛鳥のごと

明るき智慧は吾れをば去りぬ

ああ神よ、心を何處いづこにかやるべき

われの胸は廢寺のごとく

倒れかゝる肋骨ろぼねを撫でて

冷たき風「死」の香をば撒じぞ過ぎる……

六月の窓

平和なる夕日樹の間を朱に染むるとき
濃き淡き影みだす若葉のなかに
夢多き暮春の薔薇を盛る杯を舉げよ

青き空より「夏」は微風とともに降りて
杯のなかに「六月」を囁き
窓開きし書齋の鏡のなかに

柱暦の赤き 30 をば翻さん

かゝる時、君に惱みのなほありや
君は聞かん、梢のやさしき小鳴りを
また君は見ん、花影を行く鶏の鶏冠に
厳かにまた静かにも落ち行く入日の赤き姿を

冬の雨

冬枯れの庭に雨降る
枝を打つ雨の音をさけ
何處いどこにか人あり隠れ
礫つらてうつそれにも似たり
冬枯れの庭に雨降る
背向そむむけまた背向け
大理石なめいしに人散りしきて

「老の顔」刻めるごとし
庭に降る雨さきをれば
大寺の裏山蔭に
白骨の崩れ行くごと
わが骨の破るるごとし
戦おのさつ雨さきをれば
いちはやく生きのわが身に
めぐらせる白木の箱よ
こは柩、釘や打つらん響ぞ悲し

香 爐

妹よ、窓をひらけよ

彼方には夕日にかける森蔭の沼

浮草の花、夢と浮び

靄は罩める、木立から沼の面まで

そのあたり、亡き人の幻はさ迷ふ

窓を閉せよ、かくて

古びたる香爐をさしげ、眼とさせば

落葉しげき石垣の外、しのび泣く聲

また暗き敷石の上に

白金の留針落ちる響はさこえん

はかなしや、香爐の底に

思ひ出と、眠りとは

白くして柔かき褥をかつぎて臥し

細くして弱き光に、また微かなる物の搖ぎに

物憂げに白く息吐き、ほのぼのと遁れぞ出づる

妹よ、窓を開けよ

月の光は床の上に砂の如し

かの香爐をほぐらき鏡の前に据ゑれば

なほ麗しく亡き人の幻は浮び

浮草の花の薫、思ひ出の息、部屋をば満さん

病める蠶

黒ずみし障子に陽は移り行く、五月末の日
暗き日は既に海にありや、風は南より来る

蠶室の蠶、一様に臥せり、彼等は病めるなり
彼等は知れり、暗き日は既に海にあるを

風は南より來りて、障子に日は陰り

乳母車のなかに赤き芍薬は凋み行く

五月末の冷たき日や、蠶室に蠶は病めり

彼等は知れり、臺所の水甕に水、悪しく濁れるを

看護る人は家にあらず、壁に重き袷はかゝれり

土間ほの暗し、悪運を満つる

一日の終焉

石油燈の灯は亡びんとして

大なる書物の影、洞穴の如くなり

ほの白く浮べる頁の端を

這ふ蟲の羽なやましく光れり

憂鬱なる黒き網

疲れたる脳髓にかゝりて

空しき今日の虚偽と涙とほく笑みとは
潺細き吐息の下に嘆けり

石油燈の灯は、終に

血の如く赤き一点となり

いつしかに、隅々まで毒草の如き悪臭はひろがる……

忽ちにして、蟲も書物も

限りなき闇の底へと沈みたり……

やがて淵なす闇の底より

なやましき光の大蜘蛛現はれ

黒き網の間より脳髓を啄み始む……

思想は噛みさられ、靈は飛び去りて

黒き屑片かけらは闇と眠のなかを降りて

灰皿の上に音もなく積れり……

雨 後

雨去りぬ、雲低く、西の空、一條赤し

灯の映る人氣なき煤け障子にさも似たり

(床ゆかなくて土間の暗さに大いなる猫はかゞむか)

二百十日、河は太る、薄の穂、ほの白く無しじま言をまもる
岸をくだれ、唐黍の半がた傾く蔭に

ふと見出で驚ろかん、人待てるおぼこ娘の面をふせるを
こは雨に濡れ黄ろさ増せる綿の花、あはれゆかしき

ある夕暮

柿の樹の落葉が枝間、せはしげに雲を馳せ行く
夕暮れなり、夕暮れなり

葬ひに母は出抜けて、子供らは村路馳せるか
時折に、肝高き聲わたり来る

子供等よ、とく歸りこよ、雨戸は開きしまゝに暮れたり

白き物影奥より動き悠々と縁より下りぬ

猫なり、庭の暗さに消えぬ、寂靜しづけさは壺の如し
庭に音あり、小屋より歸る妹か、鍵は鳴れる

七日月、仄白はのしろに雲ぞ馳せ去る、空は病めり
言問はん、井戸端の葉欄にひそむ蝦蟇ひまのかへるに

咎はありや、咎はなしやと

親鸞聖人御逮夜

(ある年、クリスマス、御逮夜、叔父の法會と、三夜く
しくも續きしことあり、これはその第二夜の夢なり)

障子戸にしのび寄り、また懸けゆきし
黒き薄衣、何人の來りてなせし

障子戸にしのび寄りては懸けゆける
闇の垂れ衣、見よ壁に星は現はる

——忽ちに部屋は異る宇宙となりし

あなやほ暗きこの世界にちりてきし

ひとひら小蜘蛛——そは青き木の芽の如し

木の芽より青き手いでて解さがたき心を語る

——おお今宵、開山が御逮夜なる

——人もなきこの世界に忽ちに讀經ぞ起る

ほがらかな聲を分くればただ一條死者の聲あり
壁の星、落ちもやしぬる一條は死者の聲なり

あなや見る佛壇にみあかしつきて慕ひよる
わがはらからよ、たゞひとり死者うちまじる

源之丞——まこと叔父なる

いつ文身^{はり}し竹に雀よ、土色の横顔にある

こちら向け、竹に雀ぞゆれしのみ

寄れば姿も消え失せぬ！

冬の午後

村うちは影めぐり影走る落葉の音のみぞ高し
師走なり、日暮れ近か、村を出で北に向はん

宮裏の刈田を歩りく鳥のみあやしく光る

ああ光りつゝ一すぢに何をかあさる

迫りくる影を知らずや東の間の幸うくる鳥

人として一人寂しや、われは行く影を追ひけり

石橋をみよや蔭りてめぐり行く風の白さよ

河施餓鬼、蘇都婆おちて枯笹の翻るのみ

はやもその布は氷らん（一夜また文字封ぜんと）

人心寒し冷たし消えがてになほ残る文字

消えがての名號よべば、日は落ちて新月の影
名號の消ゆるは何日ぞ、流れ行く水よ答へよ

註、河施餓鬼——娠婦出産の折、死すれば不淨多くして淨土に入る能はずこ、乃ち河中に竹柵を造り、名號を記せる白布を載せ、通行人の一揃つつ流す水によりて名號の消ゆる曉、彼女は成佛すといふ傳説による佛事

羅漢堂冬夜

七日月今か落ち行く、天井に近く並べる
羅漢等が姿沈むよ

——闇の海、せり上るごと白き像急ぎ沈むよ
——雪佛、臺のままなる雪佛、沈み行くなる

忽ちに堂はほこらよ……

壁めぐる廊下の闇よ一條の髪の毛走る

親ともに亡せし心か、執念の髪の毛振りよ
羅漢らが足にからまり忽ちにまたかけ行ける

風にのる髪の毛一條

(そも幾夜、堂をめぐれる！)

千切れたる羅漢が手足うちこえつ

さて身ぶるひし身をかへし敷居くぐりぬ

註、名古屋東山大龍寺に五百羅漢安置しあり、すでに
手足こぼれしもの顔なきものも表はれぬ、傳説に
いふこのうちに己れの亡親の顔せしものありと

晴天拾遺

秋
日

千町田に面する門ぞすぢばりし扉、塞せり
傾ける「赤十字正社員」表札古りぬ

物言ふも物憂きごとし、つかれし門の「老顔」よ
寛の下、鳴子繩あり、従ひて花畑に出よ

73 —

菊あまた午後の光に佛らが眠れる如し

黒く小さき病蠅は迷ふ貪兒が腫にぞ似る

更らにいだよ「乞食禁入」立札ありて河端なり
一面に稻伏すなかに野鼠の影ちろろたり

すゞめらの聲さへきかず、野鼠の影ちろろたり
かの老いし門にかへれよ、めんどりの鳴聲高し

留守なるか——縁に留守居の娘あり

足投げて、熱れし股をぞ陽になめさする

さて裏に出よ、かくて見入れよ、水甕に落葉昨日と變れ
るを

また知れよ、灰小屋の隅、今し落さる卵、早くも冷え行
くを！

イントキシケイション

痺れる菌の甘さを残す接吻よ！

狂ほしい迄、僕が求める、ああその唇！

それは湿つて暗い落葉の下に花咲く曼珠沙華！

(歎く月の血を吸ひ乍ら微笑む花だ！)

また僕の沼にも優る深い疲勞を

覆ふてくれる暗い顔よ！曇つた午後の風景よ！

お前の髪は泥と垢とのべつとりと附く

沼岸の柳のやうだ、またそれは蛇の愛撫だ！

おおそして、お前の囁く聲々は

雨の霽つた薄暮の海に

長く、重く、呻く法螺貝と異らず

我が泥酔の魂を、星影疎らな海のなかへと沈ませる……

氷 雨

年おはる夜や更けぬらし、野に音もなし

(いでてきし部屋の壁より外套マントウのバサと落ちしか)

さぐる手の提灯ランタンは消ゆ、野邊仄白し

(かたびらを着て立つ死者か空に浮く木の行列よ)

年おはる夜や更けぬらし、永久にひとり残りし

(さぐる手の指はふるふよ提灯を濡らす氷雨や)

灯の消えし提灯さげて來ん年の闇にぞ入らん

(野のはてに灯ともしび一つ——一枚の齒を露して笑ふ老婆か！)

無題

空は嵐を封めた城の壁をさながら

地平線は遠く明るく、私の愛は

北極の氷のなかに立てた墓石

その上に、また花もない木々の上に

陽はすつかり疲れ果てた心のやうにたれかゝる

けれど陰ふむ鳥の唄さへきこえない
焼かれた草と、思想を踏んでくる妹の
足音ばかりが物憂く響く……

私の部屋の北の窓は堅く閉され

沈静しじまと悲哀は私の胸に重くよどみ

微笑と薔薇とは花瓶の中に凍つてゐる

私は今はやさしい妹と燃える壺とを待つばかり……

平 安

夜は甘し、木の實よりも

夜はやさし、乳母めのとよりも

星は空に疲れて息ふ蛾にも似たり

(水のおもてに、ほの白き翅は浮べり)

蟻も眠りにつきたらん

運び得ざりし玉蟲は水際に横ふ

いとしの人よ、いつまでか君は歎くぞ

夜は静けし、臥床よりも

君が房髪に埋もれて飽なく干草の香に酔はん

静物に讃す

— 藤井外喜雄に —

とことばに眠らん壁にかこまれて

水わづか青くたゝへし水瓶よ、汝思想の記念碑よ

なれこそはなれを描さし人よりも

なれの置かれし部屋よりもなほ古りしなれ

ながややに疲れごちの水の色、そは深淵なり

幾千年終焉の息の唇をひたせり

ややに濁りし水の色、その底ひには

なやみぞ落葉とともに沈める

さて薄よごれし土瓶よ

わが唇をふれしめよ

われは嗅がん塵の下より

カイアンが酒の香りとイソルデが戀の媚薬と

さらに苦しきジュリエット、眠薬ぞ

また辛きソクラテスが毒の香を

かくてわれ、強き激しき死の誘ひをうくるべし
遂に狂はん、水瓶の蓋をとるとき

夜の街

……街角の奇しく明るき飾り窓に

大いなる鐵の扉はいまし降りぬ

敷石路行く人暗く、足早やに去る

幾時ならん——時計は破れて下りたり

屋臺店の白きテントは傾きしまゝに捨てあり

栗を焼く老婆かへりみ、カンテラのねぢをまさあぐ

かなた仄暗き建物跡に菊は匂へり

水道の水噴く傍に潺細き聲あり、乞食なり

「さなりナポレオン モスクワ退却」

うなづきつゝマントの學生横町に消ゆ

十字街に花悉く唇を土につけたらん

十字街に灯のみ高し

夜の躑躅

追ひても追ひても猶さまよへる列なす白き羊の群よ

日曜の夢に現はる羊の群よ

なやましく、もの憂く半開きし瞳に移らう白き羊の群よ

臥床なく食なくさまよふ羊の群よ

夕暮れの動かぬ闇にうねうねと續く白き羊の群よ

音楽に、長き髪に、はた物語りに、疲れ心に、

移らふ白き羊の群よ

病みし春の横顔よ、意識なく横ふ裸體よ

ものうくて、ものうくて力なく眼とざせば

なほ列をなし、ことごとく首をうなだれ

うごめきて行く園の白き羊の群よ

夕の歌

われの額に黒き蜘蛛の巣、降りかゝり

園の薇薔の花悉く地に落ちたり

垣に沿ふて白き横顔、闇に消え

落葉せる梢に鋭き鳥の叫び、のこるのみ

ああ悲しき人生の夕は來りぬ

われ敷石に跪き心破れて唯祈る

君よ静かに吾れに來れ

夕の鐘君が後に鳴り響かん

また微風は君が髪と枯草とを弄り行かん
かくて君、わが額より不浮を拂へ

やがて月はポプラの梢に高く昇りて

わが額の上に接吻は白く

影みだす池の水の面に鯉の背は光らん

明 暗

去りし妻去りて歸らず、雪の足白さばかりぞ
家の奥、褥のうちに赤兒みどりこの足も冷えたり

みよ、やがて屋根の影繪、絹本の松は現はる
遙かにも光溢るる海に入る帆あぐる船！

またも雪、盗むが如く主もなき白き足あり

去りし妻去りて歸らず、赤兒の足も冷えたり

やがてまた屋根に積む雪に浮べり、松の影！

かなたの野邊、光に散れり、鳥群がり

忽ちに雲をひく空、雪の足白きばかりぞ

土間の塩鮭、口半ばあき、天井の暗き見入れる！

一日の微風

微風そよかぜは朝日と群れて野のどこみらかやつてくる……

最初の接吻きずは川岸の石いし、蒜あしの赤い花をぼつちり眼醒ます

さてある丘の厩の前では、肥大な馬が青空に

鼻を突き立て吐く息を混ぜ

また乾草や野菊や木槿の香を混ぜて

新夫婦の起きてた後の寢間を洗ひ

家々の爐傍を回り

味噌汁や煮粥の白い湯氣のなかに老媪おばあの微笑の顔を埋め
る……

かうして家から鋤鍬馬鍬が運ばれる前
そよ風は早くも野に来て

朝日のなかに芋の廣葉の露を振り撒き

柿の小枝に百舌鳥の胸毛をそよがせる……

やがて向ふの田舎街へ牛旁や菜葉や芋を曳き出す
車の音が小石道に軽い響をのこすとき

また森陰で草刈鎌が低く鳴るとき

そよ風は野中の鎮守の石段で

手を把つてゐる子守らの口に小歌を思ひ出させる……

次第に温まる畑の上では身の丈高い若者の

腰の煙草を香はせる

そしてふと畑を降りて水量減つた川の葦間に姿をかくす

……

かうして後は村の家内の少ない家で煤けた時計が單調に
時を刻むばかりである……

正午、白い晝餉の煙は藪の蔭から晴れた空へ真直ぐ昇る

……

それは稻田の工場の赤い煙突と並んで

またあちらの一本松の根元では肩のいかつい農婦が子供

に乳をのませる

そのかたはらに一面立つてる粟殻に

微風は時折身振りを見せるばかりだ

午過ぎ野良が賑はふとき

農夫は空に白い雲が流れてゐるのを仰ぎ見る

——寺の屋根も松の並木も小學校舎も

光と影との下を動いて行くかのやうだ

けれども風は村のなかにはまだ現はれぬ

そしてある塀の上で眼覺めた猫が日向の方へ歩み寄ると

き

そよ風は塀の傍の萩を一齊揺りはじめる……

また家々の堆肥小屋から腐つた藁や糞の香を高くあげる

それはまた干した物實を東へ移す神さんや

嫁入り仕度の娘の胸に

畑で唄ふ若者の調子ののびた唄をつたへる……

やがて辻の地藏の前に乞食爺が入日に染つて蹲むとき
黄金こがねの髻は風を疊んでぢつと垂れる……

晴天以後

落葉樹

空の月を求めて、あかく
瘦せた、あまたの手を見せる樹々……

風を避け、妻と軒端に
溜水の月をかこむ……

夏の夕

私は村の小徑を出よう

そこはすつかり影つてきたから

後ろに續いた生垣の、その繁り葉の
陰にだまつた餌を拾ふ鶏は遺して

野邊はひらける！（黄金と緑の）

耳に近くさざめくこゑ、木梢の、草の

——それは夢にさいいた海の遠鳴りである

——それは未明の灯影に私の心を洗ふ

ああほのかに、ほのかに來るよ、その香

桑の畦畔から無花果から（その實は青い！）

ギリアドの山の香も及ばない

だがその香、そのさざめきはずつと昔に覺えがある

ああ、そよ風よ！私の前を後を渡る

（それはいまは見えない私の姉である）

姉よ急がう、夜が落ちる前、吾らはかなた
山の向ふの夕陽の國へと歩み入らう！

空 居

— 福士孝次郎に —

朝の心の緑のなかに浮び上る純白の思念のやうに
その寺院は、いつも高層な屋根を碧空のなかに磨いてゐ
た

けれど私の靈は、いつも影を着ることも學び
額の皺の感觸を海のゆるやかな波にも増して欣んだため
冬ばかりの二十年をその最下層の一室に暮した！

あゝ冷笑の黒い瞳の球（サツクのバネの緩んだ黒水晶の

それは一つの、たつた一つの剥げた木像をたのしみ

後に伸びた土色の菌の耳は（いつからか干乾びてゐる）

枯草の髪の毛のすきから、半ば傾き、徒勞な啓示を待つてゐ

た

あゝ冬ばかりの二十年……

その間、私の靈には寺院の屋根が昏昏と眠りに落ちてゐ

る船のやうに

眠りつゝ進む船の底のやうに、海を割つて進んでゐるや

うに思へた

倒さになつた部屋の、夢のなかの暗い思慕……

（記憶せよ、唯一つ、黄金こがねの心象イメジ！）ある夕私は眼覺め

た

常緑樹が黄金の大氣に黄金の鈴を吊した時、（船は止つ

た！）

思ひ出の小徑

陽が傾いたゆえもなく、胸は傷む
心を見だす響も街から来ないのに
私の逍遙ふ小徑は眞直ぐ
公園の緑に消えるに

快い風、静かな流れ
だがあまりにも變らぬ光と水の眺めよ

あゝその昔逃した鯉が泳いでゐる
その昔忘れた手桶が浮んでゐる
私の影は一步ごとに夜へとどくに
私の心はあやしげなあまりに明るい朝にかへる
あゝこの快い春と夏とのあはひのとき
その夕暮れ、私の肌は軽やかな昔のしやつに身を顛ふ…

過 勞

影と影、心と心、すべてみな握り合ふ手は離れ足はほぐ
るる

眠るにはあまりに狭い格子窓、黒がれる蜂の巣となる

(ああ悲しい) さらでだに吐く煙、何の巢ぞ、網を張る
網を張る、網を張る……

幼な兒よ眠れるか、汝が父買ひ得ない搖床の夢になやむ
書きえない限りない生涯の網張る紙の面に思ふ

戯るか？ くづれ行く網くぐる籠かずかず
食もとめつぶらなる頭うちふる

ああ何を與ふるものぞ桑葉みな肉くされ網のみのこる
いかなる手、大いなる網ゆする、われも揺るる

夜の雨

庭に降る雨のひびきは

戸に近く身をよせかけて

ほこらかに口説きはじめる……

かとするると忽ちに遠くに歎く……

枯枝をなげうち、なげき

さてしばらくは聲をのむ……

すると不意に雨戸がゆれる

蠟燭の灯が横になる

私はつひに妻を呼ぶ

隣室に答へはあらず……

またしても雨戸がゆする

またしても壁の上を影が走る……

怠惰のとき

夏もをはりの、とある土曜の午過ぎである

北の窓近くに臥ねて思ひに耽つてゐるのである

(それは決して青空の、まして水の思ひではない！)

たゞ東の間の花束の重みのことか、さてはまた

明日は冷たい妹の掌てのひらにある肌ざはり……

このとき部屋を過ぎてゆく微風がある

(私はそれに氣付かない！)それは恰も

心のなかを過ぎて行く古い記憶か？

遠い海からくるのである、昔の鳥の羽搏きの

限らないものへの、切ない憧憬れの……

(海は神の胸である！)わたしは知らずに此處に寝る

微風は私を撫でて行くばかり、おろかな岩を

時は過ぎ行く……深い思ひもさめるとき

なほ微風は吹いてゐる(やゝまじる涙の冷氣！)

そして青葉(すなほで賢い)青葉青葉に囁いてゐる……

夜の時

夜の街をはなればなれに人が過ぎる

——そこには海の底ひにひそむ薄あかり……

眞の希望まことねがひをうち忘れ、鳥のおとす

影かとはかり、一すぢに進みゆくとき

心の窓の星影に私はすべての花を忘れた

色香姿を、(夢にはいつも輝やいてゐた！)

束の間のあがきの後に一つの花がやつと浮んだ

それは墓の戸口に顫へる影の氷の花である

突如、街は闇と變つた、あの人影はどこにある？

耳をすませよ……足音がする

あれは何處へ行く人か、骨を打ちあふ響にも似る？

あああれは洞のなかで戸口を求めるノックの音だ！

梅雨期

草の廣野に道、一寸ちも残つてゐない

私の前には太る河、たつた一つの黄ろい梅の實も流れな

い

私の胸には夢もない、夜毎雨うつ佛間さながら

けれど或夜月が出てゐる（人は誰も氣付かない！）

——それは私の古い悲しい思ひ出に似る

（だが唯一つの光を消すな！）——その龕燈の明りのさ

まの——

忽ち寄せる黒裝束の空の僧兵（影の黒さよ！）

忽ち消される月の影（胸の燈明！）

春立つ前に

窓をあけるにまだ早い春立つ前の日々を

髪の毛の下に二つの肩は重さが加はるばかりだ！……

けれど夕暮れたと一時^{ひととき}を忘れるな

一日中さまよひ暮した

頁の文字の動かぬ樹々のものうさに

あの一時を日脚のわづかに立ちどまる障子戸を見よ

(それは春の大きいなる書物の頁！)

おどろくばかり明るい世界に黠々と蕾をつけた枝々の影

……

最終の夢

神の息に觸れるともなく

ふつと折れた線香の灰のやうに

腰を折つたまま息たえる

無言の老婆を夢にみた

母よわたしを醒してくれるな

その夢に再び私は落ちて行く……

命の壺をこわした傍で

泣きつゝ寝入る子供のやうに

私のはたへ寄らないでくれ

妻よ、その身持ちの重い足音で

それは自ら投げだした

書物がたてる音より寒い

あゝ私には一條の

雨かともがふ光もいたい

私に來れ烈しいしびれ
しほれたままに息たえる……

老いた空

——西條八十に——

煙る若芽の樹のうち續き、臺の切れ目に
空は黒ずむ帆のやうだ、日が落ちた後の心に

暗い冬の塩風に、手觸り粗くなつた空——
垂れた廣帆よ——その下をいかに陰氣に蝙蝠が舞ふ——

(それは私の涙まじりの夢を孕んだ心である
それは空の帆が落ちるまで胸のなかで、はためいてる
る)

あゝ空は何を教へる？ (人の世の春は半ばに)
空は老いた帆のやうだ (——人を海へと急がせる)

梅雨月光曲

梅雨の夜さ、ふとしのびこむ月の影 (そは満月か！)
夢おどろかす、部屋にあまたナイアドの眞白の反射！

——ああ幾年の眠りのなかにわれはあつたか——
——いにしえ聖ひじりのしはぶきの快さに——

——われの眠りは巢だつ羽音をきいたのに——

ああ幾夜古哲人が髯の香をよろこんだのか？——

これはこれ散ばふ書物に鳥の足跡あざやかな……

われは感ず、森深く鶴立ち舞ふ朝あけを

——ああいま裸體、その脊に妻、その胸に子を——

——われしらがねと水の世界を空高々と飛昇する——

静御前

しづやしづしづのおだまきくりかへし

むかしないまになすよしもがな

地上のなべての姿、象が消え失せる

ただかすか、かすかに残る銅拍子鼓の歎くしやくり泣き

そは吾れら現代いまのよの眠のうちに古代いにしえの眼覚めるさまに、は

うつし世に息たゆるとき清風渡る七寶樹林の樂に後世を
はやも感ずる……

しづやしづ悲しみの極みの舞ひに恍惚の極みやあるを
藝術の技、お身の性に秘められしこそ幸の極み……

いま東海おどろこさうの山々に野芝麻えぞすみれや胡荽菜、ちごゆりあまた星を

撒く

季節やあでを競ふとき、木枯渡る溪あるや
たうたうの響は波か、恨み砂噛む七里ヶ濱の

さにあらず、水干の袖から起る山嵐、吉野の吹雪
なだれのわめきこえるさま、まのあたり聞く
またさらに渦まく空の吹雪のなかに宿もない二羽のきざ
す……

（この永遠の闇に連る境にわれら別れうるや？）

（いなここは花園の前の雷雨、雙蝶は別れ別れに蔭に休
らふ）

（いなわれら川邊にいでしかげらふが身ぞ

（絶え絶えの命を一つは岸に一つは流れる水に……）

（わが命われにあらず、君が身の奥に夢みる

（いたいけなわれを守れ、守るやいかに？）

（ああ悲し、山めぐり遠ざかり行く風の羽搏き……）

水干の雙翼はばさと折れる、身は崩折れる

松が枝にかかる雪の憂ひにたえず落ちて聲なく

さてはこれ白鶴の絶望の悶絶かとも（……）

はるか、はるか、はるかの輝やく蒼天に海の遠鳴り

遠雷の音弱り行く胸にひく波……

（臨終の際に知るはみな一瞬の間に生涯の縮圖

光にもまし走る親しき人の横顔！）

あなや見る忽ちに海のはやて千百の凶鳥まがつどり空かけるかと

空しくも巖角に怒る獅子さながらに波と揉む林をせなに

舟ばたに立つ處女……ざんばら髪……

帆柱ともに飛びちらふ黒き裸體——枝ともに落つ大蜘蛛

かくや——

これはまた時ならぬ白雨來や、春深い鶴ヶ岡邊に

一の谷屋敷に向ふ百千の白旗揃ひ走るにも優し
水千の袖はなびき靡きなびき馳り行く
けれどそは涯しない海の上までものがれ行くかと

しづやしづ榮光の極みの日にも恥辱なす實ははぢけしを
しづやいま空に消ゆる白帆か、氣高か、雲の一ひら……

（語れとやわれに、語れとやしづに、ゆがむその猜疑の
耳に

（よし蜘蛛の絲にもあれよ一すぢに月光の白銀のいろ

（かの峰にかゝらんとする

（白瀧の力に優るわが思ひ！）

銅拍子、鼓にはかにどよもす鳴動（世のをはり？）

池水に廣がつて行く不安の波紋、樹々の葉のざわめき、

身顛ひ

みよこのとき悠々と空に舞ふ白鷺しづか

（地のものならぬ光に浮ぶ）

白鷺よ過ぐる日にかの沼の岸邊に立つて思ふたか

(げにその底は「平安」の年も久しい淫亂の穢れに染る)
夢みたか、茂り生ふ葦間にしらむ朝明を
風立つて矢尻飛ぶかと思まがふ露のその飛亂!

さなり、かゝる朝、汝生れし!

かゝる朝、空降りし白蓮の花辨がなす

その袖になにをか秘める……

翻す扇に呼ぶか遠き日の夢のかずかず

秋の山寫る錦の直垂や野邊の彩、紫裾濃の鎧など

さては鍬形かゞやく兜(莞爾の眼差!)

ああさらに西の海かの浦にどよもす凱歌の波の間に
沈む朱の落日をも!

思ひに足らぬ片羽鳥、ふるふ、ふるふ……

息も絶えずや

極みない悲境に浮ぶ樂しさの極みの昔……

しづやしづ耐えうるやしづやしづ

眠れかしとことばにわれはかの白鳩の夢を着せん
あの宵の白鳩の御告に眠れ

(われ空の奥所の門をさとすぎる彗星にある)

(われ梅雨の木下闇、葉影より葉影に渡る白き蛾ぞ)

(われは知る宵にみし岩根白百合)

(朝早にさぐればむなし急霰にあともなさを)

(われは知る清らかの極みの花の涙にて凍りなりしを)

しづやしづ (しづやしづ……)

憂憂の馬の蹄のあまたたび行きもどり行き消えて
京洛大路の一條ぞ銀河とこそは浮びつつ
やがて眞晝の光る波、道なき空と變り行く
古の繪卷は年と色褪せて、さて
ある夕、白紙さながら……

われいつか君が黒き房髪の影を見いづる……

羽衣

前曲

天女

一夜に亡せし枝の花、朝の空に幻のとどまるごとく
夜半の夢、寢覺め枕べ、なほ夢の影あり近く、あゝ姉妹
の足の裏、淵潜り行く白鳥の

ひらめくさまに中空の波間に今も、ありありと……

さるに、君がかつぐ羽衣

悲しやな薄れうすれて失すとは

うごくかと見る山脈の消えゆく霧に双肩を現ずるに似て
君が肩、君が胸こそ露はなれ
ああ君の肉身をみる戦慄や
まはだかの野の白百合の恥らひや、われ……わが肌は
慈悲神の息吹に生るる

なよ風にまかせしのみを
碧空のはらから、海と思ひぬるこそ恨みなれ

漁 夫

われは漁夫

海に行き

漁するのみぞ

天 女

海よ

我が乙女、なにとて顫ふ
われは知らず、白き月、風ある夜半は身ふるふも

漁 夫

吾れ白き水仙花とはよも咲かじ

海、わが裸身に祕言をくりかへし
あまたたび接吻くちづけせしを
なんするぞ、かくも冷たく鏡のごとく無情なる
汝むしろ氷となりて雪を呼び
わが身をとぢよ

明るき晝は陽をはぢて、葉蔭

青き木の實と化するを

天 女

あゝ月を黒き鳥群がりて喰む……

後 曲

漁 夫

碧空に鳥の叫びは眞まことの言葉を映せども

讀むには難く……

白砂にあらはな鳥の跡尋ねども

心の辿り知るに由なし……

あなあやし

淡雪の散ると見えしが

眞夏の野邊に消えもやらず

われは今、白鳥の眞まことの相すがたを知るを得たり

あゝ月の桂の葉蔭、影と光の斑に

葉ずれ、音づれ

それにもまして優しさは

白き花揺ぐと見しに舞ひ出づる七人の翼の主を……

お乙女、うまいより今か眼覺むる

天 女

曉の來て、そが白き裾

翻へし

そよぐ

青ざめし翼のうちに

閃めかし

波ゆるやかに吾れを捲き

睫開きし水天の彼方の微笑、呼ぶと思ひし……

あゝ吾れは空しくも夢に入りしか

漁 夫

やよ、乙女、ここ南國の海のほとりに立てるお身の美し
きかな

汝の肉身しじみ、一脈の香氣となりて立ち昇る
忽ちに一連の華やげる城郭、海上に現じ
快き調、海に充ちたり

日のしづく漲るうちに夢息吹いぶき、不可思議や……
——そは海底の二片の殻を洩れ出づる……

天 女

ああ吾れは北の海

極光がなす大扇の開くがまゝに
わが裸形をば海面に浮み出さん……

氷山の

望たえにし力得ば

われ花を避け群がる鳥をわが首の廻りに集へん

漁 夫

吾れ軽き衣の下に

夕立ちのしづく涼すずろさ

花に寝る心のかぎろひ

泉噴く岩蔭に貝となり、快き酔、血潮をめぐる

吾れは聞く

空の星、海底に入り美しき眞珠となるを

汝わが腕のうち穢れなく強き子を産め

はかなくも、綿津海の泡を出で渡りくる姫を待たず

天 女

あゝ吾れは衣なくして舞のすべを忘れたり

漁 夫

見よや我がうろかた双肩に雲は散ず

白雨遠くして

虹わが額にかゝる

われ七色の衣ふりわけ

お身の眞白の腕かひなにかけん

あゝわれは天を獲たり……

「古典詩集」の巻末
にひそかにしるす

われうたびとこ世に生れ
得たりしものは榮譽にも
はた財寶にもあらずして
おろかしやふたつの疾患
二人の愛兒のみ成んとは

詩集『晴天』を評す

萩原朔太郎

1-

佐藤一英氏の詩は、現詩壇に於て比例のない特種なものである。もし此所に「古雅なる新浪漫主義」といふ言葉を許されるなれば、それが即ち此の作者の獨自な傾向を語るだらう。氏の詩を読むとき私は不思議にあの若き日の獨逸叙情詩人を思ふ。それはゲーテの「若きエルテルの嘆き」によつて歌はれた時代である。その頃世界はまだ若く、青春の情熱が霞のやうに流れてゐた。若き獨逸の學生たち

は、ハイネやシルレルの詩集を懐にして、若草萌えるリヒテンベルヒの城のほとりを逍遙してゐた。初恋と、野菊と、み空の星と、森林の逍遙とは、その頃の叙情詩の主題であつた。そしてこの純潔限りなき少年の情緒こそそれ自ら獨逸浪漫詩派の主流であつたのだ。

佐藤氏の詩をよむとき、私は初恋の人の面影を見るやうな氣がする。昔の忘れられた「エルテルの嘆き」が、どこか遠くの野原で霞のやうに私を呼んでゐる。そこには限りなく浪漫的なものがある。むしろ「古雅なる浪漫主義」の床しい面影がある。

ふしぎにまた佐藤氏の詩には獨逸的な情緒がながれてゐる。野菊のやうな素朴さ、童貞のやうな純潔さ、森林の暗い冥想とその哲學的神祕性、そして絶えず天界の理想にあこがれる夢幻的な浪漫思想

すべて此等のものは獨逸人の著しい國民性であるが、同時にまたそれが佐藤氏の叙情詩に感じられるリズムである。思ふにかうしたものは氏の獨逸文學から得た感化であらう。もしくは天性の氣質に屬するものか。私は之れを知らない。

詩集「晴天」一巻を通じ、私の愛誦置く能はざるものは次の「故郷へ」と題する詩である。私が始めて佐藤氏に注目したのも、雑誌「樂園」でこの詩を読んでからである。まるで春の出水のやうな情緒ではないか。近來これほど私を感動させた作は詩壇にない。

僕にはもはや慰めでない、酒も歌も夕暮れも

四月の空は暮れかかる。僕は書齋へかへつて行く

灯がついた、虚の花瓶にすつかり塵がかかつてゐる
その青磁に映つてゐるのは「秋」と「冬」との光ばかりだ。

妹よ、僕はもう故郷へ歸つて行かうね！

あの大きな廢寺の壁には樂書が残つてゐるといつたね！

燕らの飛び交ふ簷のその壁にもたれかかつて話さうね！

楽しかつた昔ばかりを！

私はここに一枚の古い石刷畫を幻想する。そは或る貧しき燈臺守の家庭を描いたものである。北國の寒い寒い冬の空を、鷗はさびしげに飛び廻つてゐる。貧しい燈臺守の家族等は、いま楽しい夕餐の卓についてゐる。古風な大洋燈は、黄色い悲しげな光線を壁に投げ

てゐる。窓の外には暴風雨が吹き荒れ、浪はかうかうと沖に鳴つてゐる。楽しくそして物寂しい家族等、あはれなる燈臺守の生活よ！この古き石版畫の、黄色く煤ぼけた情趣がこれを語つてゐる。この一つの情趣——寂しく、暖かく、涙ぐましく、楽しく、古めかしく、そして言ひがたい神祕を感じさせる情趣——こそ、實に佐藤一英氏の詩風である。

扉

僕の背には白い月、續く石階

前には扉、枯枝のみだれる影と僕の影

(ああ今宵、僕は破れた垣のくひにも異らず……)

その折君は妹のためにジャケットを編んでゐたであらう

君は針もつ指のひまから幸福が消えて行くのを見なんだか

古びた額から夕日の色が消え去るやう

僕はその夜、君に逢はずに家に歸つた

歸り路に僕が投げた水仙は流れに冬を死んだであらう

僕が觸れた扉のひきにてに翌朝君は粗くふれたことだらう!

かかる詩の情趣は説明できない。正に一つの「象徴的なもの」である。比喻を以ていへば、亡き祖母の遺物なる毛絲の手袋を弄びながら月影のさす教會堂の庭を逍遙してゐるやうなものである。一つ

の「情緒的な神祕」である。「病める蠶」と題する詩は、集中で最も象徴的神祕思想の高調されたものである。ここにその一部を抜く。

蠶室の蠶、一様に臥せり、彼等は病めるなり

彼等は知れり、暗き日は既に海にあるを

風は南より來りて、障子に日は陰り

乳母車のなかに赤き荷葉は凋み行く

五月の末の冷たき日や、蠶室に蠶は病めり

彼等は知れり、臺所の水甕に水、悪しく濁れるを

非常に暗鬱で物恐しい豫感の迫ってくる詩である。その他「池を去る前に」「秋」等、いづれも私が條件なしに推賞する絶唱である。とにかくこの類の詩風は、他に類例のない獨特の氣稟をもつてゐる點で、現詩壇に一家をなす價值があるだらう。

要するに私の著者に關する興味は、その獨特な氣韻に於て、何所かしら「昔の浪漫主義への若き青春の復活」を感じさせる所にある。それは何となく古風であり、そしてまた何となく若々しい。たとへば古き廢園の庭に萌えた若草を見るやうである。古く且つ新しい。老いてそして水々しい。その上に勿論それは「象徴主義の洗禮を受けた浪漫主義」である。「近代的感覺によつての古風な浪漫主義」である。今日我々がシエレーやハイネの詩風にあこがれるのも、つ

まりはこの著者の示してくれた者を要求するに外ならぬ。我々の成長した近代的精神にまで、一つの水々しい少年の情緒を注ぎ、それによつて新時代への若返りをしやうといふのである。

最後に私は、この天分ある新人を發見することに於て、私よりも一步先を越した福士幸次郎氏の賢明に敬意を表したい。かつて私は福士氏の詩を評して、一種の情緒的な神祕觀があると言つたが、佐藤氏の詩風にそれと類同のものが感じられるのも一奇である。たしかに佐藤氏と福士氏との詩には、或一種の共通な氣分がある。北海の海のやうに、一つの暗く、憂鬱で、黒ずんだ、そして限りなく素朴で純潔な浪漫的情趣である。ここからして、私等は同一の詩派——何と命稱してよいか知らない——に屬して居ると言へるだらう。

最も敏感の讀者は、尙そこから一步進んで、更に福士氏と生田春月氏との間にある親交を考へてみるが好い。けだし一つの興味ある哲理を發見するだらう。

(大正十二年一月一日發行「日本詩人」所載)

古典詩集

定價 圓五拾錢

昭和三年八月二十日印刷
昭和三年八月十五日發行



著者 佐藤 一英

發行所 中西政市
東京市小石川區大塚一丁目一五番地

印刷所 山口金藏
東京市牛込區山吹一丁目八十九番地

【萩原印刷所印行】

發行所

東京小石川區
大塚上町一五

中西書房
振替東京七二七〇五番



文學士 山崎敏夫編

改訂版

明治大正短歌選

定價 四角六分
洋裝 八角
送料 圓

山崎氏の明治大正短歌選は、茲に増補大改訂を加へられ、新装をこらして世に出る事になつた。本書は、現代歌壇の名家四十有餘氏の歌一千餘首を輯録し、嚴密なる頭註をほどこしたもので、その採擇の正鵠なる、その編纂の整正なる、まさに現代短歌史の一大縮圖であり、明治大正歌壇の代表的大詞華集である。本書の特色は、作品を作者別にした事、各作品を選出するに當つて、その作品が現代歌壇史の上にもつ意味、及びその作品が作者の歌風發達史にもつ關係といふ點に非常の留意がはらはれてゐるといふ事などで、かの何々一萬歌集などの類とはもとより同一の論ではない。わが歌壇はこゝに最も整正せる一大金文字塔を築いたわけであり、まことに我國詩歌壇の大偉觀である。小社は多大の自信を以つて短歌に關心をもつ大方の人々及び國民詩歌の殿堂に參ぜんとする多くの人々に本書を捧げる。

石田元季著

廣川松五郎氏裝幀

江戸時代文學考説

内容目次

- 一、江戸紫と京鹿子
- 二、如偶子
- 三、鈴木正三
- 四、謎と當話
- 五、俳諧の源氏
- 六、二人静とその類作
- 七、半井ト養の醉笑庵の記
- 八、四十二の眉目あらがひ
- 九、享保年間に於ける堀田六林の俳文集
- 一〇、浄瑠璃の風塵隨筆
- 一一、堀田六林の俳文集
- 一二、餘延年の風塵隨筆
- 一三、本居宣長と人見黍
- 一四、江戸自慢
- 一五、あなたと任
- 一六、醉笑庵之記(半井ト養)
- 一七、四十二の眉目あらがひ
- 一八、三、まにふんで(堀田六林)
- 一九、風塵隨筆(餘延年)
- 二〇、本居宣長人見
- 二一、邑面話之次第

著者石田元季氏は、三都を通じての名だたる蔵書家であり、博覧強記の士として、江戸文學研究の權威である。この江戶文學考説は、江戶文學の源流、發展、變遷、及びその特色を、歴史的、文學的、社會的の點から、徹底的に考察したものである。本書は、江戸文學の源流、發展、變遷、及びその特色を、歴史的、文學的、社會的の點から、徹底的に考察したものである。本書は、江戸文學の源流、發展、變遷、及びその特色を、歴史的、文學的、社會的の點から、徹底的に考察したものである。



